

8月20日の中日新聞日曜版の「世界と日本大図解シリーズ」ではお産がテーマとなっていた。「自然で主体的なお産」ということで有名なファン助産院(東京都杉並区)が載っていた。以前、有名とは知らず、娘(現在7歳)の時にお世話になった。徒歩20分の近さに住んでいた上に、たまたま私の患者がそこで産み、様子も分かっていた。「自然で主体的なお産」というのは病院で行われる様な医療措置(陣痛促進剤・帝王切開等)を受けず、妊婦自身が産む時の姿勢や環境など選ぶお産のことをいう。病院では、今では減って来ている様だが、以前、必要性の有無に関係なく誰でも浣腸・剃毛・会陰切開等が行われていた。

最近、中日新聞を読んでいると、産科医や助産師が不足しているという話題が取り上げられている。少し前は小児科医が不足しているということが話題になっていた。どちらも、医療分野の中でも特に不規則な労働を強いられ、訴訟にもなりやすい。

そして、お産も子供の病気も身体的な自然が顕著に表面に現れるという点で共通である。そうした自然のあり方に慣れ、理解があれば、不安は少ない。子育てに慣れた母親であれば、家でできる範囲で養生し、見守っていれば良い状態か、危険な状態かが見分けられて、無闇に病院に駆け込むことはない。「自然で主体的なお産」を体験した女性にとっては、お産に病院の必要性をまったく感じないと思う。

『オニババ化する女たち』(三砂ちづる)にこう書いてあった。

非常に豊かなお産を体験した女性は、お産の前と後では人が違うのではないかと思うくらいに変革をとげます。お産を通じて自分のからだと向き合えば、非常にインパクトのある経験として、女性の人生の核となります。

それは人間の根っこになるような経験ともいえます。・・自分はひとりではなくて、自然とつながっていて、そこから力が出てくる、ということを感じさせるような経験です。

本来ならば、お産は女性が身体的な自然への理解と信頼を得る絶好の機会である。もともと女性は毎月の生理を通じて、自らの意志では制御できない何かを意識せざるを得ない。そこに既に「自然とつながって」いる感覚があるわけだが、お産はそれをいやおう無く感じさせる体験だと思う。「自然で主体的なお産」であれば、尚更である。

女性には本来、妊娠・出産という能力が備わっていて、正常出産が当たり前である。ところが、子供を乗せて平気で高速道路を走っている人が、「もしものことがあったら」と助産院を避けて病院を選ぶ。身体的な自然への理解と信頼が薄れてしまっているからだと思う。

その背景には、女性の身体が実際に信頼に足るものでなくなっているということもある。妊娠・出産を遂行できない女性の身体は異常である。冷え症となったり、婦人科に関連して病んでいるということは、妊娠・出産の能力を落してしまっているということである。これでは正常出産が当たり前とは言えなくなって来る。こうして多くの女性は身体的な自然への理解と信頼を得る絶好の機会を失うわけである。こうした女性は母親となって、更に人工的なものへの依存心が高め、それは子育てに影響する。小児科医が足らなくなる。悪循環である。

産科医や助産師、小児科医が足りないというのは問題の枝葉であって、根本ではない。共生観に基づいて自然を理解し親しむということが、身体的自然についてもなされなければ

ばならないだろう。(2006年9月秋分)